

氏 名	たかの やすし 高 野 泰 志
学位の種類	博 士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 252 号
学位授与の日付	平成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 文 化 ・ 地 域 環 境 学 専 攻
学位論文題目	In Pursuit of the Natural Body: Hemingway's Struggle with Conflicting Values in His Life and Works (「自然」な身体を求めて：ヘミングウェイの作品と人生における相矛盾する 価値観との戦い)
論文調査委員	(主 査) 教 授 福岡和子 教 授 丹羽隆昭 助教授 水野尚之 助教授 廣野由美子

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は、20世紀アメリカ文学を代表する作家アーネスト・ヘミングウェイの作品を、身体観という角度から再評価を試みた研究である。第一次大戦後の身体観の変化と社会的混乱が、ヘミングウェイ文学にどのように表出されているかを分析する。新旧の価値観の間を揺れ動く作家個人の内的葛藤をテキスト分析により跡付けると同時に、それを戦後の社会的混乱とそれに伴う価値観の転換の中で動揺する当時の人々の精神風土を反映したものとして位置づけようとする。

論文は全4部、10章に別れ、各部が身体の異なる部位を扱う構成となっている。

第1部では、戦争における負傷兵の描写を扱う。まずヘミングウェイ以外の作家たちによる描写をとりあげ、19世紀の南北戦争における負傷兵の描写と、20世紀の第一次世界大戦における負傷兵の描写との違いを指摘する。前者では負傷兵が動物のメタファーで語られ、もはや人間として扱われていないのに対して、後者では医学が進歩した結果、身体が激しく変形した兵士も、修復可能な人間として描かれる。そこには、身体の各部位を、機械の部品のように交換可能なものであり、修理可能なものとして捉える、新しい身体観が見られるのである。次いで、ヘミングウェイの作品の中に、機械テクノロジーを用いて人間の身体が「自然な身体」へと回収されていくさまを読み取り、彼がそれをどのように捉えていたのかを追求する。そこにはテクノロジーに対する期待と不安が矛盾しながらも併存していることが明らかとなる。

第2部では、麻酔、および痛みの感覚を、ヘミングウェイがどのように描いていたかを取り上げる。19世紀最大の発明のひとつであり、西洋文明の偉大なる到達点と考えられていた麻酔は、20世紀以後、徐々に「感覚の麻痺」という否定的な側面で捉えるようになっていく。これは第一次世界大戦が終わった直後の作家たちが、一様にかつての理想に幻滅を抱き、無気力状態にとらわれていたこととも関わりがある。ヘミングウェイは30年代以後、自らの文学的不毛を「痛みを感じないこと＝麻痺の状態」になぞらえ、自分の作品の主人公の麻痺状態を断罪することによって文学的スランプを脱出しようとしていたのである。

第3部では、梅毒の表象を扱う。梅毒はヴィクトリア朝の抑圧的な性道徳においては、性規範を逸脱したことに対する神の怒りと考えられていた。とりわけ「性の解放」が起こった20世紀初頭には、梅毒はそういった進歩的な性意識に対する反動的な価値を担わされることとなった。ヘミングウェイはヴィクトリア朝的な厳しい性道徳の中で育てられたことが知られているが、周囲の人々には性に対して進歩的な考え方を持っていることをことさら強調しようとした。しかし、彼の作品を綿密に読んでいくと、ヘミングウェイが進歩的な考え方を唱道しながらも、ヴィクトリア朝的な古い価値観から逃れることが出来なかったことが明らかになる。死後出版の『エデンの園』に見られるように、彼がヴィクトリア朝的価値観からはとうてい容認され得ないような「異常な」性的志向を持っていたらしいことが、最近の研究で明らかとなっている。ここでは、それ以外の作品から、ヘミングウェイが、古い価値観を誰よりも捨て去ることを望みながら、自らの性的願望に生涯、罪の意識を感じ続けていたことを指摘しようとする。

第4部は、髪描写を扱う。ヘミングウェイ作品の中では女性の髪の長さは妊娠能力の有無と一致している。また、女性

の髪を短く切るというモチーフは彼の作品に頻繁に現れるが、それはヘミングウェイの父親になりたくないという願望を表していると考えられる。つまり、ヘミングウェイは女性の髪を短く切ることによって象徴的に女性を去勢しようとしているのである。しかし30年代以後、ヘミングウェイは徐々に女性性に対して歩み寄りを見せ始め、女性の持つ妊娠能力を、広く創造性を示すものとして、それまでとは違った表現を与えるようになる。晩年の作品に現れる髪描写は、初期のものとは異なり、男性が女性性を獲得する、つまり創造性を獲得するために髪を変形するという図式になっている。

以上のように、本論文は、一貫して身体観という一つの角度から、ヘミングウェイの全ての長編、及び多数の短編を論じたものである。生涯を通してヘミングウェイは、社会規範として確立されていく「自然な身体」を求めながら、自らの身体に深く刻み込まれた古い価値観からも逃れることが出来なかったことを明らかにした。そして、そのような作家自身の内的葛藤を伝える彼の文学は、同時に、大きな価値観の転換期に直面した当時の人々の精神的混乱を表象するものであることを合わせて論証した。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、20世紀アメリカを代表する作家アーネスト・ヘミングウェイの作品について、身体観という角度から再検討を試みた研究である。

本論文は、ヘミングウェイの長編の全て、及び多数に上る短編を対象とし、伝記的、文化的資料を駆使しながら、従来の読みでは看過されてきたヘミングウェイ文学の新たな面を開拓した画期的な論文ということが出来る。ヘミングウェイ研究は1980年代を境に大きく変化した。従来は、感情を抑え不必要な修飾を極力排した文体を特徴とするモダニズム的側面、第一次世界大戦後の虚無的な精神を伝える、いわゆるロスト・ジェネレーション的側面、また一方では、戦争、狩猟、釣りといった男性性を称揚する側面などにもっぱら焦点をおく研究が中心であった。しかし、未公開作品の出版や、伝記的研究の進展、フェミニズム文学批評の影響などを契機として、1980年代ごろから、彼の両性具有的志向に着目したものなど、それまでとは全く違ったヘミングウェイ研究が行なわれるようになった。本論文はこうした近年の研究の動向を踏まえながらも、作家の性的志向ではなく、「身体観」という新しい着眼点からヘミングウェイ文学に迫る独創的なものとなっている。

本論文は4部、10章構成となっている。第1部では戦争において負傷、変形した身体、及び、それを機械のように修復可能とみなすテクノロジーの進歩、第2部では、痛みを感じる肉体、及び麻酔によって感覚を麻痺させる医学、第3部では梅毒などの性病に罹患した肉体、性病を性的規範の逸脱に対する神の怒りと捉えるヴィクトリア朝の性道徳、第4部では女性の妊娠能力のみならず、作家の創造性をも示唆する髪の手という表象など、それぞれ当時の身体観の変化を追いながら興味深い論考が展開される。それら身体各部位、及び身体に関わるこれらのテーマは、いずれもヘミングウェイの小説に繰返して出てくるものであるが、本論文では、こうしたテーマを単に登場人物がその時々において体験するプロット上の要素としてみるのではなく、作家における内的葛藤の表象、かつ時代精神の表象として論じようとする。ヴィクトリア朝の価値観を持った両親の元で育てられたヘミングウェイの身体には、古い価値観が深く刻み込まれていた。表面的には旧弊な価値観を打破し、新しい価値観を唱道していたかに見えるヘミングウェイも、実は新旧の価値の間を揺れ動いていたことが指摘される。そうした作家個人の葛藤が、上に述べた身体にかかわる表象を丹念に追う作業によって明らかとなる。言い換えるなら、ここには従来とは大きく趣を変えた不安や罪の意識にも悩む作家像が提示されることになる。

さらに、本研究の独創的な点は、そのような作家個人の葛藤を、第一次世界大戦後の社会的混乱とそれに伴う大きな価値観の転換の中で動揺する当時の人々の精神風土を反映したものとして位置づけていることである。そのため、ヘミングウェイの作品だけではなく、19世紀の戦争文学、妊娠、麻酔、医学上のテクノロジーなどを論じた20世紀当初の医学資料、同時代の人々の身体観を知るための広告、ファッション等を論じた文化的資料、更に、当時のいわゆる梅毒文学と呼ばれるものなど、本論文が考察の対象とした文献は実に広範囲に及ぶ。こうした広い知見に基づいて、ヘミングウェイの個々の作品を読もうとする本研究は、随所において従来の読みとは異なる新鮮な解釈を展開している。しかも、極力感情表現を抑制したヘミングウェイ特有の文体に常に緻密な分析を施すことによって、その新たな解釈は強い説得力を持ち、ヘミングウェイ「文学」の研究を決して逸脱することのない一貫性を保っているということが出来る。

以上のように、第一次世界大戦後の価値観の混乱期にあって新しく社会規範となった「自然な身体」を求めながらも、古

い価値観をも捨て切れなかったヘミングウェイの文学作品を、一貫したアプローチで考察し、同時に当時の社会の文化をも「身体」というユニークな観点から捉えなおした本研究は、既にヘミングウェイ学会でも注目され、新しい文学研究の方法論を示唆するものとして更なる貢献が期待できる。

また、本学位申請論文は、文学と人間環境との関係を研究することを目指して創設された文化・地域環境学専攻・ヨーロッパ文化環境論講座にふさわしい内容を備えたものといえる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。